214　切除不能に終つた肝癌症例の肝シンチグラムについて

国立がんセンター　放射線診断部
照井頌二，小山田日吉丸

原発性肝癌で，試験開腹に終つた症例について，その術前肝シンチグラムと開腹所見並びに手術不能に終つた原因について対比し検討したので報告する。

症例は，昭和49年7月から53年12月までの約4年間に，術前肝シンチグラムが施行され，組織診断が得られた17例である。男14例，女3例で，年令は19才から64才で，その平均は50.9才であつた。Au抗原陽性が8例（47％），AFP陽性が16例（94％）であつた。^{67}Gaシンチグラムの行なわれた6例，全例に有意の集積が認められた。

シンチグラム上，腫瘍が右葉を主とするもの11例，左葉を主とするもの4例，両葉に認められたもの2例であつた。手術不能に終つた肝シンチグラムの特長は，欠損部が不整像を呈し，uptake patternの乱れと，骨髄の描出が著明で，並びに，腫瘍が右葉にある場合，左葉の円形化が認められた。

一方，手術不能の原因は，腫瘍が肝全体を占めていたもの3例，健側と思われた葉への播種，転移が7例，他臓器への転移によるもの3例，高度の肝硬変が合併しており，腫瘍との境界が不明で区域切除が出来なかつたものの4例であつた。術前シンチグラムで手術不能と診断出来なかつたのは，健側への播種，転移があつた7例についてであつた。7例中粟粒状播種が認められたものが5例あり，シンチグラムでは所見がつかめなかつた。また転移の認められた2例の転移巣の直径は2㎝で，検出限界のものであつた。他臓器への転移は，肺，腸管，後腹膜に各1例づつ認められた。これらは，術前^{67}Gaシンチグラム，胸部X－P等で診断出来た。シンチグラム上，腫瘍が右葉を主体とする11例中6例に，胸部単純写真で，右横隔膜の挙上が認められた。術後生存日数は14日から166日で，その平均は58日であつた。

シンチグラムのみで肝癌の診断及び手術の適応を論ずることは出来ないが，手術不能例シンチグラム所見を，手術所見と合わせて述べた。

215　ヘパトームにおけるAFP値の変動様式について

朝日生命成人病研究所　消化器科
岩瀬　透，中野正美，岡野健一，佐々隆之

ヘパトームと慢性肝炎における血中AFP値の変動様式を比較し，ヘパトームにおける血中AFP値上昇時の特徴をあきらかにし，ヘパトーム診断をより早期に可能にしたいと考えた。

昭和47年8月から昭和54年6月までに，3117例に対してAFPを計6628回測定したが，このうちAFP測定を頻回に実施できたヘパトーム13例と慢性肝炎31例（AFPが異常値を呈していたもの）を対象とした。AFP測定は，2抗体法によるRIA法によった。

慢性肝炎のさいAFP値は，1300 ng/mlにまで上昇した例があった。しかし慢性肝炎ではAFP値の上昇はGPT値の上昇に後れておこり，GPT値の下降後にAFP値も下降することが特徴であった。両者のピークの間には，約2週～2か月のずれを認めた。

いっぽう対象としたヘパトーム13例のうちで，AFPの上昇過程を観察できた11例についてみると，ヘパトームのさいのAFP値の上昇は，GPT値の変動と関連していないことが一つの特徴であった。さらに，時間(日)をX軸に，AFP値の対数値をY軸にとり，AFP値上昇の経時的推移を観察したところ，11例の全例でAFP値は直線的に上昇するという特徴があった。ヘパトームにおけるAFPの上昇過程では，時間とAFP値との間に指数関数的関係が成立するといえる。このAFP上昇直線の勾配は癌の発育速度（癌細胞数の増加）を反映するものであろう。勾配が急峻であったものは早期に死亡し，いっぽう勾配がゆるやかなものの死亡までの期間は長い傾向も認めた。

しかし上述したヘパトームのさいのAFP値の指数関数的上昇は，かならずしも死亡まで持続するものではなかった。対象としたヘパトーム13例のうちでAFP上昇過程を観察できた11例中の4例では，AFP値がほぼ不変で推移する場合，あるいは下降する場合のあることを観察した。13例中のほかの2例では，AFP値は観察をはじめた時点から不定の変動を示した。癌組織の壊死あるいは発育抑制などが，AFP値に反映されている可能性も考慮したい。

まとめ　ヘパトームでAFP値が上昇する場合には，その上昇は慢性肝炎にさいするAFP値の上昇とは相異してGPT値の上昇と関連していないことと，経時的に指数関数的な上昇様式をとることを報告した。

Presented by Medical*Online